

『大阪大学言語文化学』執筆要項

1. 「論文」または「研究ノート」について

原稿はワープロ等の活字印刷のものを3部提出する（2部は表紙を除いてホッチキス留め、1部は表紙を含め、ホッチキスで留めずに提出）。用紙はA4サイズで横書き。和文原稿の場合は40字×30行（本文・脚注とも11ポイント）、欧文原稿の場合は30行（本文・脚注とも12ポイント）の書式を用いること。提出原稿の形式は以下のとおり。

- (1) 1枚目：表紙
- (2) 2枚目：論文要旨(A)（日本語）
- (3) 3枚目：論文要旨(B)（日本語以外の言語。日本語で本文を執筆した場合のみ、提出。）
- (4) 4枚目以降：本文

ページ番号は、4枚目を1ページにして、本文だけに付ける。それぞれの執筆上の注意は、以下のとおり。

(1) 表紙：

表紙ページに以下のように記入すること（[]内は説明。基本的に刊行される時と同じ形式）。

論文の題名 [本文と同じ言語] * [半角アスタリスクを1つ付ける]

[1行あける]

執筆者氏名 [本文と同じ言語] ** [半角アスタリスクを2つ付ける]

[1行あける]

キーワード3語 [本文と同じ言語]

[3行あける]

* [半角アスタリスク1つと、半角スペース] 論文の題名 [要旨と同じ言語]（執筆者氏名）[丸かっこをつける。要旨と同じ言語で。要旨が非ローマ字言語の場合は、ローマ字表記も付記する]

[1行あける]

** [半角アスタリスク2つと、半角スペース] 執筆者の所属 [日本語で書く]

- ・論文の題名：日本語と日本語以外の言語（論文または要旨を書いた言語）で書く。
- ・執筆者氏名：日本語と日本語以外の言語（論文または要旨を書いた言語）で書く。
日本語以外の言語が中国語、韓国語、ロシア語など非ローマ字言語の場合は、名前のローマ字表記も付記する（論文はローマ字アルファベット順に掲載します）。
- ・キーワード3語：論文本文と同じ言語で書く。
- ・執筆者の所属：日本語で書く。
- ・タイトルとサブタイトルのつなぎ方、スペース、大文字と小文字の区別等は、以下の例にあわせること（論文名等は『言語文化学』vol.12 から引用）。

— 論文題名の書き方 —

（日本語、中国語などの場合）

フランス語化政策とマイノリティー

— ケベック州移民統合政策の縮図としての中国系移民 —

（英語の場合）

An Unweeded Garden That Grows to Rhyme:

The Relationship between William Shenstone's Gardening and His Poetics

[英語の場合は、タイトル、サブタイトルの先頭は必ず大文字、それ以外の場所の冠詞、前置詞は小文字、代名詞所有格 (Your, His, My) は大文字。]（それ以外の言語は、それぞれの慣例に従うこと）

— 氏名の書き方 —

（日本語例）言文 太郎

（朝鮮語例）젠분 다로 (GENBUN Taro), 김민호 (KIM Minho)

*朝鮮名・中国名の場合は、姓名を分かち書きしないこと。

（中国語例）胡 琳 (HU Lin) *ローマ字表記は日本語読み (KO Rin) 等でも可。

（英語例）GENBUN Tarou [姓（全大文字）＋名前（先頭だけ大文字）]

（ロシア語例）ИВАНОВА Мария (IVANOVA Mariya) *ローマ字表記も付けること。

— 所属の書き方（必ず日本語で） —

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程（学生の場合）

大阪大学言語文化研究科（常勤教員の場合）

大阪大学非常勤講師（非常勤講師の場合） など

ー キーワードの書き方 ー

(日本語例) キーワード: ホテル、都市メディア、消費文化

(英語例) Keywords: *ut pictura poesis*, the garden-poetic relationship, Thomas Percy's ballads

(2) 論文要旨 (A)

日本語で 1,000 字以内。冒頭に「論文要旨(A)」と書き、日本語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(3) 論文要旨 (B)

本文を日本語で執筆した場合のみ、提出が必要 (日本語以外の言語で本文を執筆した場合は、提出しなくてよい)。

日本語以外の言語で書く。欧文の場合は 400 ワード以内。中国語、朝鮮語の場合は 1,000 字以内。冒頭に「論文要旨(B)」と書き、要旨(B)と同じ言語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(4) 本文

(a) 原稿の長さ、字数

「論文」和文では A4 用紙 13 枚以内、欧文では A4 用紙 18 枚以内 (図表・参考文献・注など全てを含んだ枚数)。図表・参考文献・注など全てを含んだ完成原稿を提出すること。本文の字数は和文で 12,000 字以内、欧文で 5,000 ワード以内を目安とする。

「研究ノート」和文では A4 用紙 10 枚以内、欧文では A4 用紙 15 枚以内 (図表・参考文献・注など全てを含んだ枚数)。図表・参考文献・注など全てを含んだ完成原稿を提出すること。本文の字数は和文で 9,000 字以内、欧文で 4,000 ワード以内を目安とする。

(b) 冒頭に本文と同じ言語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(c) 章・節番号

「0」ではなく「1」から始めること。漢数字表記は認めない。「はじめに」「まとめ」「おわりに」等にも章番号をつけること (例: 1 はじめに)。

— 章・節番号の書き方 —

1 (半角スペース) セクション題名 (「1.」「1 章」「I」などとしな

1.1 (半角スペース) サブセクション題名 (ピリオドのあとにも半角スペース。「1.1」「1.1.」とはしない)

1.1.1 (半角スペース) サブサブセクション題名 (ピリオドのあとにも半角スペース。「1.1.1」「1.1.1.」とはしない)

(d) 和文中の句読点 「。」と「、」を用いる。

(e) 数字表記

横書きであることを考え、原則としてアラビア数字を用いる。アラビア数字は半角で入力する。

(f) 特殊文字、文字修飾

文字装飾は、原則的に和文の太字と下線、欧文のイタリック体のみとする。また①、②などの特定のワープロにしか出せない記号は、できるだけ使用しないこと。

(g) 例文番号

例文の先頭に(1), (2), (3)などの丸っこ付きの番号を用いる。下位区分には、a., b., c.を用いる。

— 例 —

(1) 東京に行った。

(2) a. *田中さんに行った。

b. 田中さんのところに行った。

(h) 図表

図表には番号と図表名を付ける。複雑な図や絵はできるだけ避ける。図表は実際の位置や大きさに近い形で本文中に配置し、その上で規定枚数を超えないようにすること。

(i) 参考文献・引用文献の表記

参考文献の一覧は本文の後に付ける。スタイルは、既刊号のものを参考にする

こと。外国語文献の場合は、それぞれの言語の慣例に従うこと。

— 日本語文献例 —

著者名『著書名』発行元、発行年。

著者名「論文名」『掲載誌名』巻号数、発行元（発行団体）、発行年、pp.1-16。

(j) 注

注は通し番号をつけて脚注とする（『言語文化学』完成版と同じく、各頁末に置く）。なお使用ソフトの関係でページ末注にすることが難しい場合は、一括して本文の最後に置いてよい。注のフォントは12ポイント程度とする。本文中の注番号としては、「これは例文です¹⁾。」のような上付き文字を用いるか、または「これは例文です（注1）。」のように書くこと。

(k) 謝辞

査読に不都合があるので、応募時には謝辞を書かない。採用決定後は謝辞を記載してもよいが、謝辞が著しく長い場合は削除を求めることがあるので注意すること。

2. 「書評」および「図書紹介」について

どちらも和文でA4用紙4枚以内(4,000字以内を目安)、欧文でA4用紙7枚以内(1,500ワードを目安)。「図書紹介」は、今年度出版または出版予定で、筆者自身が執筆または編集に携わった図書の紹介記事を対象とする。「書評」は、それ以外の図書を対象とする。

原稿は、ワープロ等の活字印刷のものを1部提出する（ホッチキスで留めない）。用紙はA4サイズで、横書きとする。和文原稿の場合は、11ポイントで40字×30行、欧文の原稿の場合、12ポイントで30行とする。それ以外の規則は論文、研究ノートに準じる。提出原稿の形式は以下の通り。

1 枚目：書評者名、書評の対象となる本の書名、著者、出版社、出版年度、ISBN など。

2 枚目以降：本文

3. 論文採用後のフロッピー原稿提出について

採否の審査後、掲載が決定した論文については、フロッピー原稿を提出する（640MB

までの MO や、CD-R 等も可)。論文の入った文書ファイルはワード 2000 で読める形式にすること(テキストファイルも可)。その他の形式については、あらかじめ事務局に照会すること。

4. その他

<原稿の種類変更>

一度提出された原稿の種類(論文、研究ノート)は、原則として変更できません。

<ネイティブ・チェック>

本文、論文要旨とも、母語以外で書かれた部分については、かならずネイティブ・チェックを受けてから提出してください。文章力が著しく劣る場合は内容の如何にかかわらず不採用となることがあります。

<無断引用・剽窃>

近年、文献やウェブサイトからの無断引用・剽窃が大きな問題となっています。言うまでもないことですが、引用箇所については、出典をはっきりと示してください。査読段階で無断引用・剽窃が指摘された場合、たとえ故意でなくとも、不採用とする場合があります。刊行後に問題が発覚した場合、執筆者の研究者としての将来が損なわれるだけでなく、学会誌の信用を著しく低下させ、他の学会員に大きな迷惑をかけることになります。この点を重々認識した上で執筆してください。

その他執筆に関してご不明な点があれば、大阪大学言語文化学会事務局 (genbunjl@lc.lang.osaka-u.ac.jp) までお問い合わせください。